

■今号の表紙画家／永井郁くん

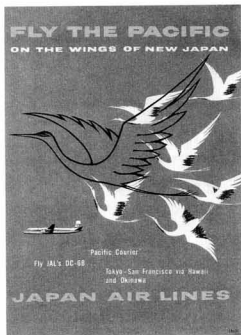
## JALの鶴マーク、誕生余聞

京橋区木挽町——こびきちょう。クラシッくな響きのする町名だ。まして山国育ちには何やら懐かしい文字でもある。たぶん江戸時代には、棟梁や大工さが寄り集まって住んでいたのだろう。あるいは文字通り、ノコギリの音しきりで賑やかな木材作業の町だったのかも……。

現在では中央区銀座一丁目、二丁目などと改名され、「木挽」の面影など捜したって見当たらない。それでも中央通りの「銀座の柳・由来の碑」から歩いてほんの数分、JR有楽町駅北口までだって、徒歩十四、五分という至便の地である。

### 「銀座アートスタジオ」の看板

戦災で焦土となった銀座が遅しく復興を始めて、木挽町がまだ木挽町だった昭和二十四年、この地に「銀座アートスタジオ」の看板を出した信州飯田の一族がいた。間口の狭いバラック平屋建て。湿っぽい土間に机が五つ六



JAL Archives Center

日本航空アーカイブズセンター

つ。戸口にいちばん近い机で受付ボーイ役も兼ねていたのが、一族で最年少の学生（多摩美大）永井郁雄くんだ。吉沢的美、乙丙という叔父二人と実兄の辰雄とで設立した「銀座アートスタジオ」は、戦前すぐ近くで営業していた空襲のため焼失した「吉沢図案社」が捲土重来、飯田の疎開生活を切り上げて上京したものだ。ルーツは市田村（現高森町）牛牧の吉沢家。屋号「泰座」の十一人兄弟は、みんな父親ゆずりの進取の気性に富んだ人物ぞろい。永井郁くんもその血筋だけに、見かけによらず不羈奔放の性向を持っているようである。

銀座アートスタジオの近くに広告代理店の「万年社」（本社大阪）があり、デザインや版下の発注を折々受け、

永井デザインナーの作品はとくに気に入られていた。やがて万年社は日本航空の発足とともに、一手にその広告を引き受ける。初めは新聞の二段八行程度の小さい突き出し広告だったが、これが評判上々で、以来、永井郁くんは万年社の専属みたいになっていく。

「どう？ 郁ちゃんもひとつ……」

さて、右掲の日本航空のポスターである。

国内での開業から三年、いよいよ国際線の就航にとりかかった日航では、JALを外国人に知らしめるためのポスター制作に着手。当時の一流デザイナー数名に依頼した作品数点をアメリカに送り届けて、審査決定してもらおうという手順だった。

「どう？ 郁ちゃんもひとつ描いてみないか。荷物に紛れこませて、一緒に送ってやるからさ」

そう言ったのは日航宣伝課で彼より十歳ほど年長の鷹司信兼さんだった。若い郁くんの才能に惚れ込んでいた元華族の、おおらかさと悪戯心から出た言葉だったかも知れない。「よし、描いてみよう!!」

考えに考えた末、思い浮かんだイメージが千羽鶴だった。川端康成の当時の傑作題名が意識の奥にあったのかな……とも想像されるが、彼は勇躍してB全判の大型ポ

スターに挑んだ。バックは薄紫一色。白い小さな鶴群を右から左に羽ばたき翔ばせ、大きな輪郭の一羽が中央に舞う。キャッチフレーズの「FLY THE PACIFIC」を黄色で、「ON THE WINGS OF NEW JAPAN」を白抜きで……。世界に向けての日本の美意識の発信だった。

大空に飛び立つ鶴のマーク

「おい！ 郁ちゃんのがイチバンだってさー」

鷹司信兼さんから知らされたのは師走の暮れ近く。かくて昭和二十九年二月二日、JAL国際線の第一便はサンフランシスコに向かって飛び立ったのである。

日航と千羽鶴ポスター。以来、鶴は日航のシンボルになり、鶴マークの誕生ともなる。そしていつしか群れから離れた一匹狼・永井デザインナーの日航のみならず航空業界での大活躍につながるのだった。

本誌の表紙「ジャイプールの姫君」も日航関係の取材で訪れたインド。その街の観光名所「風の宮殿」を舞台に、貴族夫人や令嬢がモデルになった撮影会スナップ。金糸銀糸の輝く色鮮やかなサリー姿に目を奪われ、本来の画家魂が奔流した作品だ。

以上、問わず語りで知った半世紀を超える友好交歓からの独断的紹介文、お許しを乞う。(牧内雪彦記)